慈光

第九卷　第一號

昭和二十四年七月二十三日第三種郵便物認可
昭和三十二年一月十五日発行（毎月一回・十五日発行）
（通第九十四号）

目次

年頭に想ふ……花田正夫…（1）
易往而無人……福島政雄…（5）
生死出づべき道……榊原徳草…（9）

年頭に想ふ

花田正夫

あばら家のその身そのまゝ明けの春

とは、晩年の一茶の年頭法悦の心境でありますが、年毎に念仏者の胸を何時までも打ち続けることでありませう。

この『あばら家のその身そのまま』とあるところに、遠い昔から如何とも為し難い、罪業深重、煩悩熾盛の身の程をまざ〳〵と省みさせられます。

盤珪禅師の常の言葉に『煩悩具足の凡夫が、自分で自分の解決をしようとするのは、血に汚れた皿を、血で洗ふに等しい。たとへ初めついた血は洗ひおとし得ても、また新しい血に染められて行く』とあります。

儒家にも有名な悲歎の説話があります。即ち真面目な儒者が、聖賢の道に叛くと床柱に釘を打ちこんで誡め、そのことがやむと釘を抜いて喜んで居りました。然し始めの頃は柱一杯に釘を打ち込みましたが、永年の修養で遂に最後の釘を抜き得ました。すると無数についた釘跡を見つめて、さめ〴〵と泣き崩れたので、友人が其理由を聞くと、

『釘は抜き去つたがその痕跡はどうすることも出来ぬばかりか、抜き去られた、克ち得たと思ふ刹邪にすでに慢心が湧きおこつて、抜いた跡に又々新しい釘を打ち込まねばならぬ、それを想ふと自分の生涯は無駄事で終る外はない』と、又しても泣き崩れたといふことであります。

一茶自身は六十歳の文政五年の正月の日記に

『御仏は暁の光りに四十九年の非を悟り給ふとかや。あら凡夫のおのれ如き、五十九年が間、闇きよりくらきに迷ひて、遙かに照らす月影さへ頼むほどの力なく、たま〳〵非を改めんとすれば、暗々然々として、盲の書を読み、蹇の踊らむとするに等しく、迷ひに迷ひを重ねぬ。げに〳〵諺にいふ通り、愚につける薬もあらざれば、なほ行末も愚にして、愚のかはらぬ世を経べきことを願ふのみ』

と誌して『あばら家のその身そのまま』と仏前に投げ出さずには居られない盲者、蹇者、と告白し、救ひ無き身なればこそ『その身そのまま明けの春』をいよ〳〵渇仰して

居ります。

そこには廃悪修善の自力作善の路が閉ぢて、転悪成善の他力自然の白道が開かれて居ります。

歳旦をまづおとづるる念仏かな

とは、池山先生の句であります。年頭起き出でられて、いまだ家族の誰とも挨拶を交はされぬさきに、南無阿弥陀仏、南無阿弥陀仏とお念仏の訪れをうけられた端的の感激であります。

御年四十二歳、何処までも名利の奴を脱し得ぬ、地獄一定の身に徹せられた先生が、爾来、よきにつけ、あしきにつけて、ただ念仏の大悲を、斯くの如きの我等がためと、ひとすぢに仰がれて送り迎へられた年頭の所感であります。

然し年頭の讃仰は同時にまた歳末の感謝であります。そこに春秋を貫いて、常念仏の先生の徳音にふれるのであります。それが同時にまた『念仏の息絶え終られた』先生の生涯でありました。

須菩提の迎仏

新年を迎へ、初陽を拝すると共に、仏を迎へ、仏光に浴する妙趣を前記の二句に教へられますが、阿含経に説かれてゐる『須菩提の仏を迎へる』説話を更に想ひ浮べます。それは次の如き話であります。

仏陀の成道の第八年目でありました。馴れると手ですることを足でする喩の如く、仏弟子達にやうやくゆるみの心が見え始めました。

このことを感知された仏陀は、弟子達の求道の心をゆり覚すために、御姿を消されて、天界に昇り給うて、仏母摩耶夫人のために説法をなされて、三ケ月の夏安居を過されました。

仏陀の御姿を見失うた仏弟子達はもとよりのこと、王侯や大衆は、仏陀を求めて右往左往し始めました。ことにウダヤナ王は悲しみ歎いて死ぬるばかりでありました。そこで王の身を案じる群臣達は栴檀香木をもつて仏の形像を作り、仏の徳香を浮べて、王を慰めました。

ハシノク王はこれを聞いて、国中の巧匠に命じて黄金の仏像を作つて、生ける仏の如くに御給仕申しました。かくて無上の宝と不滅のまことをたたえまつりました。

この形像こそ地に仏像が出来るさきがけとなりました。

然し、多くの大衆は『仏陀は今日何処に在すぞ』と叫び

求めて、渇仰の念はいや増すばかりでありました。そこで仏弟子中、天眼第一の阿那律尊者の所に至つて仏陀の所在をたづねました。尊者は精根をつくして、三千大千世界を観じて、何処にもその尊容を見出し得ませんでした。

阿難や大衆は非常に悲しみ、『仏陀はすでに涅槃に入りたまうたのではあるまいか』とさへ案ずる者もありました

神足を持たれて天界に走せ、大衆から姿を消し玉うてゐられた仏陀は、やうやく大衆の心が熟し、求道の念の発起するのを照見なされて、神足を捨て通力のある弟子にその所在を知らしめられたのであります。

目蓮尊者が先づこれを知り大衆にこれを告げると、狂喜した人々は一刻も早く仏陀を拝し、慈訓に浴したいと願ひ、尊者の所に詣でて

『尊者よ、我々に代つて天界に昇り、仏陀にまみえようと願つても天界に昇り得ない我々を、どうか哀愍し給うて、再び人中におかへり下さるやうにお願ひ申して下さい』

と口々に懇請しました。

尊者はその旨を仏前に申し上げると、仏陀は三ケ月の安居を終へて帰られる日時と場所を教へられたのであります。

このことを伝へ聞いた人々は限りのない慶びの中から、王侯貴族は或は兵隊を整列させ、或は七宝をもつて道を飾り、人々は夫々にあらゆる供養の準備をととのへてお待ち申したのであります。

やがて時は参り、仏弟子達は一人残らず精舎を出でて仏陀をお迎へに行きましたが、独り精舎にあつて衣を縫うてゐた須菩提もやをら立ち上つて仏陀をお迎へしようと右足を地に下した時

『今、お迎へ申さうとしてゐる仏陀の形相は何であるか。眼耳鼻舌身意の名であらうか。ただし地、水、火、風の四要素を云ふのであらうか。是等の諸法はみな空寂のものではないか？』

斯様に気づくなり、尊者は仏陀の教を誦しました。

『仏おがまば「無常」からおがめ、昔も、今も。
仏おがまば「空」からおがめ、昔も、今も。
仏おがまば「無我」からおがめ、昔も、今も。』

と何度も心身に泌み透るまで繰り返した尊者は、

『我なく、人なく、作すこともなく、
形容もなければ、教もない。
諸法みな空寂！
我いま、真法に帰依し奉る』

と唱えて、須菩提は山を出ずに静かに「空」を観じたのであります。

さて仏陀の降下の時が近づくと、金道、銀道、水晶道が作られ、天人は空中にあつて散華焼香し、天楽を奏し、王侯は礼装して大衆を率いて出迎へました。時に蓮華色比丘尼は

『今日、国王、大臣、国中の人々の往かないものはない。それだから、比丘尼の身分では仏を早く拝むことは出来ないであらうから、転輪王の形容に化して、真先にお迎へ申さう』

と思ひ聖王の形を現し、種々の宝を化作して、誰人より先に立つて仏をお迎へ申したのであります。ところが仏陀の御前に立つと、変化の姿は消えて本形に還り、比丘尼となつて仏を礼しました。その時仏陀は

『比丘尼よ。汝が第一に我を拝したのではない。
須菩提は諸法皆空を観じて如来を拝してゐる』

と誡められました。

『遭うて遭はず、遭はずして遭ふ』といふこともありますが、蓮華色比丘尼と須菩提の迎仏において、正しくそれが申せるのであります。

祖聖親鸞の七百回忌の近い年頭、聖人をお迎へ申す人々の様々の姿において、須菩提の仏を迎へた逸話が、深い意味をもつて感佩されるのであります。

真に聖人に会ひまゐらす道は、外なる形式ではありません、祖聖の真精神に参会する外にありますまい。茶道には『一期一会』といふことが根本精神であると聞きますが、七百回忌こそ文字通り一期一会であります。この秋、同一念仏の中に、永劫のえにしを結ばれ、徹底した一期一会に遭ひ難くして遭ひ得たよろこびを共にさせて頂きたいものであります。

易往而無人（二）

福島正雄

その次が『必ず超絶し去りて、安養国に往生することを得よ』この超絶であります。この超絶といふのは〝超〟といふ味は、すぐとびこえてといふことであります。

ここを昔の方は斯ういうて居られます。超といふ言葉とならんで、でると書いてある、出があります。これは親鸞聖人の言葉の使ひ方でありますけれど、超と出と、かうならべて見ると、超といふのは、一瞬にして、一足とびにといふことで、出といふのは段々に、漸次にといふ意味であるる。さて親鸞聖人は、竪出・竪超、横出・横超といふ言葉を使つておいでになります。その竪といふのは、縦横のたてでありまして、横はよこで、この次の『横に五悪趣を截り』よこざまに五悪趣を截り、悪趣自然に閉づ、といふのがあります。その横であります。で、竪横といふ言葉を使つて、竪と云ふのはまあ自力の方である。それから横といふ方は他力である。

ところが、その竪といふ自力の方にも竪出・竪超があり、たてに自分の力でもつて何処までも自力の修業を積んで、どんな長い歳月がかかつても、仏の位までずつと昇つて行く、さういふ行き方を竪出と申されて居ります。それから成る程、自分に修行して行くけれども、或所まで行くと、そこに一足とびに行くところがひらけて来る、さういふのを竪超、自力で行くのであるけれども、或ところまで行くと、そこにパッとひらけて来る。これはまあ、仏教で申せば禅宗などのさとりといふものはさうであります。禅の修行をずうつとやつて行かれて、何かある機会にであります。禅宗の修行した方の伝記などを読んで見ますと、自分の御師匠さんから或る刺戟をうけて、その時パッと心がひらけて、さとりの心持になつて来る。その或所までは自力で修行を積んで進んで行つて、パッとひらけて来る、そこのところを竪超と、親鸞聖人が云つてゐられます。その行き方と云ふものは禅の修行なんかの行き方がさうなのであります。

それからまた竪出といふのは、仏法で云へば、聖道門の教で、何と申しますか、三大阿僧祇劫といふやうな非常に長い歳月をかけても、だん〳〵と修行を積んで、とう〳〵しまひには、仏のさとりの境地まで行く。それが竪出なのであります。

だから自力のうちに、どこ〳〵までも一段一段と漸次に行くといふのと、或所まで行くと、パッとひらける、この二通りになるのであります。

それから横といふのは他力をいふのであります。これは仏様の力、仏力によつてひらける。それも横出・横超とか云はれてありまして、横出といふのは、他力によるんだけれども、そこに自力がある。だんだん行く、これは何でありませう、所謂、浄土宗なんかがさうなんでありませう。これは阿弥陀仏のお他力によるんだけれども、然しその念仏称名の効を積んで行く、そこに矢つ張り、自力といふものを認めるといふやうなことでありまして、親鸞聖人のお言葉で言へば、他力のなかの自力、お念仏申す、称名するといふのは矢張り自分の力であるといふんであります。他力のなかの自力といふ教は、いはゆる浄土宗に限らず世の中に多いのでありまして、例へば基督教などは大分親鸞聖人の仰言る、他力の中の自力、所謂、横出といふのにあたるでありませう。つまり神の救済にあづかるんだけれどもそこに、我々がこの悔い改めて、そしてつとめて行くといふやうなところは自力である。そして神の救済にあづかるのであるといふやうなところでありまして、どうも普通の基督教はさういふ横出といふのにあたるやうであります。これもさう一概に申されませんで、基督教も徹底して来ると、ほとんど親鸞聖人の信仰に近いところがあると感じて居ります。

私は基督教を信じてゐるのぢやありませんから、あんまり大したことを言はれませんけれども、然したとへばこの、マルチン・ルーテルといふ様な、あんな人の信仰のことを書かれたものを読んで見ますといふと、ほとんど親鸞聖人の絶対の他力のすぐお隣りまで来てゐる、まあ紙一重にまで来てゐる。それ位までにルーテルなどの信仰といふものは、殆んど徹底に近いと感ずるのでありまして、それだから基督致といふものは徹底すると浄土直宗のやうになるのであります。

これは前に申し上げたかも知れませんけれども、私が三十歳の頃でありましたでせうか、三好愛吉先生といふ方は偉い方でありまして、秩父宮様や、あの御兄弟を御教育申し上げた傅育官長をつとめられた方であります。この三好愛吉先生のところに行つて、たつた一度お目にかかりまし

たけれども、その時三時間ほどお話を聞いたことがあります。その時に、基督教について私が何か問題を出して聞いたのであります。さうしたら、三好先生が

「それやあ、基督教は入り易いけれども、徹底し難い教である。仏教の方は入り難いけれど、入つたら徹底し易い。だから日本国民の世界における宗教上の使命といふものは、あの基督教をドン〳〵日本に入れて、仏教の力でもつて徹底したものにして、今度は徹底したところの基督教を西洋に逆輸入してやらねばならん。それが吾々日本人のやるべきつとめである」

といふやうなことを云はれまして、若い頃でありましたから大いに感激して、さうするんだ、基督教を親鸞聖人の教でもつて徹底したものにして、西洋に逆輸入するんだとえらいことを考へて居りましたけれども、それから三十何年になりますけれども、私の力でそんなことは一向出来てゐません。甚だお恥しいことであります。

然しながら性質を云へばさういふものであります。基督教は実際入り易くして徹底し難いといふのはほんたうでありませう。

西洋の中世の有名なセント・フランシスといふ人があります。あの人の祈りといふのが、フランシスの『小さい花』といふ小さい本にありますが、それを読んで見ますといふと、或人がフランシスのところに泊りに行つたのであります。何のために逗留したかと申しますと、フランシスといふやうな人は、さぞ大したお祈りをするであろう。そのお祈りをする有様を直々に見たい、祈りの声を聞きたいと云ふやうな気持で、数日間とめて貰うて逗留してゐるけれども一向にフランシスが祈る模様がない。不思議だなあと思つてゐると、或晩夜中に、グッスリ寝たやうな振りをして、大分夜が更けてからフランシスはソーとこの寝床から出てそしてひざまづいてゐる。やあ、フランシスの祈りが始るんだなあと、一生懸命になつて耳をすまして聞いてゐると、フランシスは只、

『お・とうさま。父よ！父よ！』

と親を呼びかける。その声ばつかりで、夜の明けるまで『父よ、父よ』と呼びつづけて夜が明けたといふ。さういふことがあの本に出て居ります。

あれなんか読んで居ますと、そこまで行けば祈りといふものも、今の基督教の教会でやつてゐるやうな祈りでなくしてであります。そんな親を呼ぶ、父よ、父よと親をよぶ祈りといふことになると、ほとんどお念仏と隣り同志のやうに聞えるのであります。それだから基督教といふものも徹底すれば、親鸞聖人の信仰と紙一重位のお隣りのものになつてくる。そこまでに基督教を徹せしめるといふのが、成る程日本国民として世界に対してのつとめといつていい

でありませう。これはよく皆様の胸に刻みこんでおいていただきたいのであります。

基督教は、よその教だとただ排斥せずに、基督教は仲々よいところがあるんだから、それをひとつ親鸞聖人の教によつて、徹底したものにしてあげたいと、自分の力ではいけないけれど、親鸞聖人の教の力によつて、そこまで行くやうにしたいと、これをこの私共の念願にして行きたい。力が弱くて仲々思ふ通りに行きませんけれども、そういふ念願をもつて行つて、そして基督教といふものを非常に広い胸にとり入れて、とやかく排斥するといふ態度に出ないといふところに、仏教の立場といふものがあると思ふのであります。

基督教の方からはさうぢやありません。異教じや、異端じやと、仏教でも何でも排斥する態度がありまして排他的なところがあるのであります。然し向ふがいくら排他的であつても、ほんたうに大乗仏教、ことに親鸞聖人のみ教を中心にして心持がひらけたならば、それだけの胸のひろさといふものが出来てくるものだ、私がそれ程胸がひろいのか、それは大分問題であるけれども、然しさうなるものだといふことを考へて居ります。

文珠の物語

文珠が他行せられる。その後姿を舎利弗尊者が讃えて『あの姿を拝め、皆々見よ』と。文珠の歩まれるところ茨の中である。その茨に文珠足が触れると、茨が自然に開けて道が出来る、それを舎利弗が後から拝んで居る。

人生といふものは茨である、ジャングルである。どう足を踏みこんで行くか、誰れでもこの茨の道を行つて居るのである。

この茨が、往生極楽の道を行くものには自然に開けて来る道がある。風来つて門おのずから開くといふ光景が念仏者には味賞せらるるやうである、仏智不思議を感ずるものには文珠菩薩のましますことも思念せらるるのではなからうか。

足利浄円師著「光輪」斉藤正雄氏施本より跋。

生死出づべき道

榊原德草

あまり年寄でもないのに老人臭いことをいふやうで甚だ赤面の至りであるが、五十才をすぎると何か老ひたなあと思ふ、思ふだけでなしに毎日の何かしらにその徴候がみえてくる。たとえば友人の名を忘れる、顔までわかつてゐて昨日まで難なく口に出たその人の名前が急に思ひ出せなくなつてしまう。かうなつてくると私の今の年頃—五十六才だがその頃の父の日常が思ひ出される。またその年ごろで亡くなられた妙心寺山内の春光院の川上孤山老師が想ひ起される。母のその頃がさうだつた。「忘れて〳〵……」と用事をし乍らよく嘆きをこめて独り言を云つてゐたものである。

『五十にして天命を知る』と孔子さまは言はれる。『四十にして惑はず』では、未だ惑ひと組み合つてゐる。少くとも惑ひといふ相手がゐる、組みついてゐるか、抛げ飛ばされてゐるか、何れにせよ相手は「惑」であれ「不惑」であれ、土俵の内か外かにゐるのである。まだ「惑ひのうち」である。所が五十代になると天命を知るのであるといふ。天命は何かと思ふ、天の命令なのか、「おまへといふ者は、いろ〳〵やつて来ただらうが、結局、まあそんなところなんだ」と品定めをされて、尤もなりと合点の行く年齢が天命ではあるまいか。『天命を知る』——「齢知命に至る」といふことは、五十才を越すと、先づ、私には物を忘れることから自分の品定めが実証されることになる。私には悪戦苦闘の過去があり、これからも苦は離れないが、悪に戦ひ苦に闘ふやうな積極的な力——肉体的にも精神的にもそんな華々しいことはできなくなつてくる。物を忘れるようでは、相手に対して正々堂々と敵対することは不可能である。この夏なども、無事に今年の夏が越せるか知らんと暑熱に対して受身で考へたことである。この夏は、この冬はと、天候に対してさへも身体を案じるやうになつたり、物忘れしたりするところは、これ天なり、これ命なりで、自分の身柄がやうやく老人の域に入つた証拠になる。

身体の弱りや物忘れなどの外に、育てた子供が大きくなり、個性をもつた人格になつて私と対立してくる。今までは私の部分みたやうなものが、離れて独立して此方に向つて居直る。こちらが押せば向ふからも押してくる。明治大正の思想や感情で押すと昭和もいまの全く異質の思考や決断で押し返す。考へがずれてゐる。自分でも現実に生きることを常に念願してゐて、新しい考へや感情を身につけようとするが、既にさう志すこと自体が後れてゐる証拠である。子供達は、そんな努力も意識もなしに、ちやんと現代に生々と活きてゐる。こちらが負けである。年をとつたものだと思ふ。——その年頃の自分を想ふ、親爺に理屈をいつて遣り込めたりした、恰度その親爺になつてしまつたのである。エヂプトのピラミツトの中に古代文学で書いた石の破片があつた。学者が苦心して訳読したところ、それはその時代の宮内属官といつたやうな人の書いたものの断片だつたさうだが、その文意は「今の若い者はどうも仕方がない」といふことだつたと、何かの本に書いてあつた。私と親爺、私と子供達、つまり親と子のズレは五千年も前から、ズレてゐるらしい。これは今後もこの鉄則は遠く遙かに未来へ続いて止る時がないだらう。

父に別れ、師匠に別れ、母に別れて、肉親とては只一人生き残つてゐた兄が故郷にあつたが、その兄が今年の三月には亡くなつてしまつた。私はこれで天下に一人も親兄弟を持たない。あるのは妻と子供達だけである。だんだんと上からなくなつていつて、そして下からは離れられて行く年齢になつてしまつたのである。孤独とか身にしみるさびしさとかいふものが犇々と応えてくるのである。

五十を越して天命を知つたかに幾らかは思へて来ても、四十代に通過した筈の惑ひはいよ〳〵深くなるばかりである。相手になつて惑ひと取つ組む元気はなくなつたけれども孤独感に陥ち込んでゐる私に力がなくなつただけ、ます〳〵惑ひの方は傍若無人の振舞で身の毛孔めがけて浸到してくる。惑ひのとりこになつて孤独寂寥感は深まるばかりである。

一人しか生き残つてゐない兄の死は殊に私を孤独なものにさせた。異母兄であつたが小さい時から私の母に育てられた兄の一人なので少しも異つた兄などの感は懐いたことがない。母から聞いたところによると私が生れたとき兄が抱かせてくれと言つたので七才の兄に抱き方を教へて、かうして大事に〳〵抱くのだよといふと、兄は緊張してしまつて厳かに私を抱きとつたが、もうかなはぬと思つたのか直ぐ母に返したといふ。その緊張ぶりが面白かつたと兄のことになると母は大笑ひして話すのだつた。世話をやい

て泣かされたり、口笛の吹き方を教へてくれたり、柔道を習ひにゆく兄に連れられて行つて、兄が押へ込みなどやられて真赤な顔で耐えてゐるときなど私は口惜くて上になつてゐる相手を突きとばしてやりたかつたり。それから中学二年の夏に家庭の再三の転変でその頃既に京都に住ふ母の所へ連れて来て貰つたのもこの兄であつた。

あれから星霜四十年を経た。その間、後半の十余年間は兄の曲解から音信も不通になつてお互ひに気づまい年月を送つたが、突然の訃報にこの三月接して、急ぎ故郷の兄の寺、私の生れた寺へ兄の死顔に最後の訣別をとげに行つたのであつた。たつた一人の兄だから何かの機会に心の溶けあふ日もあることゝ思つてゐたし、その日の一日も早く訪れてくれて互ひに笑顔で元の兄になつて貰ひたかつたのだが、遂に兄との結ぼれは解けずに兄は死んだのである、私の心残りはそれだけだつた、それだけに死顔を拝した私には暗い涙が流れた。とり返すことのできない悔ひの涙にお念仏が伴うた。結ぼれは兄の曲解としても兄とか私とか言ふことは、生きてゐてこそであつて永遠に帰らぬ兄の姿を前にしては、私とか兄とかの対立はもうそこに無いのである。私と兄とはあつても、対立はないのである。

兄の死顔の傍に坐つて涙の中に湧いてくるものは、只悲しいことだけである。すまない気持である。すまないといふ感情を起させるのは、私が是で兄が非であるとする、十余年間の曲解の責を兄に着せて冷然としてゐた、腹の底に巣喰ふ私の善人ぶりであり、正義感である。我である。勝他の見である。「善悪の二つ」を「存知する」我である。いかなる私も兄の額に手をやつて、まことに死せる厳粛なる冷たさにふれたとき、まことの死は、生きてゐて是非善悪に拘づらふ私のすべてのはからひをそのまゝの姿で力を脱きとつてしまふ。生きてゐることは一口に言へば我である。兄は我が崩れ去つて永遠の世界に移り住んだ。私の我はこゝに兄といふ対立を失つた、我は対立の形でしか成りたゝない。しかし兄の我と思つたその我も実は私のうちに我が立ち仂くからである。「万法は唯心なり、心の外に別の法あることなし」とはこゝに知る仏語ではないのか。私に我があるから対立をうむ。対立はそのまゝ私を立てゝ他を否定するための対立である。互に認め合ひ許し合ふために対立はしてゐないのが私等の現実である。もし私が許し合ひ認め合ふとすれば我にとつて利益なときだけである。善といふことがあり、是なること、真なることが永遠に普遍に存在はするだらうが、それが私に降りてくると、形はそのまゝでゐて中味は我欲の御都合主義に化けてしまふ。反対に私が悪いと思ひ、懺悔しても、慟告号泣して泣きわびても、それがものの三十分とは続かない。つまり真から

底から罪にも悪にも頭が下りきらない。いつかはけろりかんと後を向いて知らぬ顔をするか忘れてしまふ。そして何かの場合に再びその悪が持ち出されるとぐいと我が受げて立ち弁明し抗弁して私といふものを必死に擁護し、果ては我が是で彼が非なることを宣言するまでに至る。どうしてこんなに五尺の身体、六十年の短い一生が私にとつて可愛くてならないのだらうか。長くてあと十年か十五年のいのちなのに離れたくない失いたくないの我れ可愛しの妄執、守り固めたくてならない妄念、まことに久遠と云ふこと永劫といふことの迷ひの根元が今私の総身に滲みて骨をなし肉を形づくつてゐるのであらう。

兄は御浄土に往かれたのである。恩愛の断ちがたいきづな、生死の甚だつき難いことを私に知らしめてゐる。死んだ兄がいよ〳〵懐かしく慕はしい私は、生あれば死があり同じく手をとつて歩いた兄とも何時の日か別離あることはひとごとのごとくは肯けてゐたが、全くそれが私の身の上にさう成つてきた現在にあつては、生死は尽き難く、恩愛は甚だ断ち難いとの聖人の御訓へが身に応へてくる。聖語に生命の灯を点じて御浄土から兄が教へてくださるのである。

一口に人は死ぬと仏になつたといふ。これは遠い昔から仏の教がわが国民の生命にしみ込んで、我等の祖先から血の中に伝はつて流れてきた、その血の中に聞く仏語である。死することは仏になること、兄はほんとに今はもう仏様になられたのだと思ふ。

兄の最近の死から私は、十一才の時に死別した父のこと、四十余才での母との死別、師匠との死別、先に死した兄姉のこと、近親の死から法友の死、幼な友達の死、数限りない祖先や過去の億万無量の仏となられた人々の死を連想して、死と仏達、無数無量不可計の仏様がたと対ひ合つて此方の岸から貪瞋二河を渡つて往く私を思ふ。彼方の岸から此方の岸へ人寿百歳の河幅一ぱいにひろがる火の河水の河の直中に、も一度改めて言ふなら彼方のお浄土の阿弥陀仏の御苦労で造つて下さつてそして此方の私の岸へ届かせて下さる南無阿弥陀仏の白道一つが、彼方の仏様の仲間に入れて頂く只一つのたよりである。五劫に思惟し永劫に修行されて阿弥陀仏が御苦労の限りを尽してあちらから私の方へ杭を打ち石を運び土を盛つて造り上げて下さつた白道の一条道、南無阿弥陀仏の一すじみちを、たゞ一つのたよりとして往かせてもらふのである。

無我になれたらさぞ安楽であらう。無心に丁度雲が山の間から浮び出るやうな私になれたら、何と素晴しいだら

う。だが所詮、己れが〻瞬時も止まないでは、かなはぬ望みである。生きてゐる間は我が絶えない、生きてゐることが常一主宰と云はれる我による外ないのである。無我、無心、といふ言葉はあつても、まことにすばらしいこのまことの生ける姿は私にその影とてもない。

「仏法は無我にて候」とは蓮如上人の語である。仏法が即ち無我なのであつて、我等は我である。仏法を聞き我のぬけない悲しみをも知らされて、仏法の具現者なる阿弥陀仏に引き合せて頂くことによつて、仏の在す浄土への道を与えられるのである。諸々の仏達の在す国へ阿弥陀仏の引導によつて往生させて頂くのである。

まことに「唯仏一道、独清閑」であつて、清閑とは仏の無我無心なる大慈悲の光明から顕れるその徳相である。この仏より発する加威力によつて、吾等はその浄土に往生させて頂くのである。御浄土に往かせて頂くお念仏の一条道が私の五臓六腑にしみとほつて水と火の二つの河の真中に清閑の一道をつくつて下さる。これは御回向の南無阿弥陀仏であります。生死の迷ひに居て、しかも生死のきづなを解きほぐして下さる、そして完全円満に生死なき御浄土へかへらせて頂く、迷ひはたち難いがその迷ひを転じて悟りの世界に往かしめられる。生死出づべき道は、このたび兄の死を縁として且又老ひ行く私をふりかえつて見ていよ〳〵迷ひの深い我の強い私が感慨つきぬことであるとともに、お念仏の清閑なこと、あたゝかいこと、常に私を御浄土への方向にひるがへし立てなほして下さることを思ひ、兄ともいつの日か倶会一処の御益に至らせて頂くことを楽しむ心がおこるのである。かうして兄の死といふことに対して私の現在の中に生死出づべき道を深く知らせてくれた兄は、浄土に在つてこの私を慈しみ憐んでゐることであらうことがお念仏のうちに照り映えてくることであります。

（三一、九、）

新刊紹介

晩年の親鸞

文学博士　福島政雄著

―目　次―

関東を去つて。　御本書のこと。　御和讃のひびき。
正像末和讃。　太子奉讃。　悲歎述懐和讃。
笠間の念仏者へ。天神地祇のこと。　歎異のこと。
毒とくすり。　自然法爾。　示寂と余光。

発行所。京都市下京区花屋町西洞院西。永田文昌堂。
定　価。百弐拾円。　振　替、京都九三六番

新春法信抄

南無阿弥陀仏　　○　京都市　足利浄円

念仏はあかるきものときこゆるなり
とはのやみぢをてらしみちびく　（八十翁　浄円）

○　京都市　白井成允

灯火をかかげていゆく聖あり
そのみひかりに安らひてゆく

○　愛知県　鈴木橋村

業平の歌の田面に初日出づ
須弥壇の弥陀の裾より掃始む

○　滋賀県　西村武三

火と水にたじろぎづめのわれながら招喚のみ声につゝつゝと往く

○　山口県　松村繁雄

若水を汲みしこの日も早暮れて何処へ行くぞおのがいのちは　（一日の夕）
更くる夜をひとり筧の音聞けば久遠の母の声かとぞ思ふ　（二日の夕）

○　荻市　村田芳彦

新春お目出度う御座います。慈光誌を拝続以来もはや六年目を迎へる事になり、御蔭を以て闇地を歩いてゐる自分の姿が見えて来る様になり、ひたすら慈光の慕はるる身にさせて頂けましたことは本当に嬉しいと思ひます。

○　滋賀県　秦　とく

……主人がとうとう死去いたしましたので淋しい中にも思出深い有難い元旦を迎へました。……十二月廿四日午前九時三十分、静かに他界いたしました。お蔭様で死の三時間前まで食もたべ、自分の身の有難い事、子供の孝行にしてくれるのをくり返し〳〵喜び、最後に三回お念仏を称へて、自分で掌を合せ微笑しつつ、それから程なく楽々と永眠いたしました。……。

○　岡山県　西村清三

菅瀬芳英先生の晩年頂による『強頑の坊主も癌で願往生』と短冊に書かれました。先生の上顎に癌ができラヂーム治療を永い間大学病院でうけられだ当時に書かれたものでした。病が進み、後になつて鼻の穴に抜けて発音に困られ脱脂綿を詰めて居られました。死の遠からぬを自覚して居られたのに狂歌めいたことを云つて自己の死病を客観視して居られる風格は、私の眼底に今なほ残つて居ります。

年々に登　山谷かはられど光焔王とわれを摂取める
病床の旅けはしくも四十六年願力不思議一筋の道
七十三歳登りつめて下見れば弥陀の回向もれぬ蓮台
聖徳の宮守り祭る願望を弥陀の使僧に頼む年かも
公園と骨堂を守り美化するを願望なかばなるぞ嬉しき

○　岡山愛生園　信策栗下

編集後記

何となく今年はよい事あるごとし

元日の朝晴れて風無し　石川啄木

彼の没後に出た「悲しき玩具」の中の歌をそのまゝな、空晴れて風静かな正月で、温かに和やかでありました。

昨年の十一月、イギリスの歴史家トインピー教授が来日しての講話に

「人類の当面してゐる危機を救ひ、文明史の最後の章を造るのは宗教である。……キリスト教、回教、仏教などの東西の宗教が互に長短相補い、新しい文明の生れることを望む。……ことに穏かで静かな極東の信仰が、西欧文明の行き詰りに対して、重要な役割を果すことを期待する」と述べて日本の史学界に大きな刺激を与へたと朝日紙が報じて居ります。

一昨年のベルリンの花祭に参加されたイギリスのファスレー氏が、東洋の仏教は血を見ない宗教である。世界の平和もこの教に期するところが大であるという旨の講演を非常な熱情を以つてせられた由、山田宰さんから伝聞いたしました。

又独乙のスプランガー教授はすでに失明されてゐるのに、福島政雄先生著の「自由と信仰」の独訳文を、奥様の、代読で聞き取られ、丁寧な御礼状を昨年末よこされました由。

斯様に有眼の世界人から大きなる期待を持たれる仏教徒われらは、真剣に省みる時が、潮の如く迫つてゐるのを感じ、聞法、求道、報謝の一筋の白道をしつかりと踏みしめて歩ませて頂きたいものとひそかに期して居ります。

——○——

△「易往而無人」の福島先生の御講話は親鸞聖人が二雙四重と申されて、あらゆる宗教を分類された点を明らかにして下さり、他力横超の道は広大無辺にましますことを知らせて頂きました。

△生死出づべき道の榊原徳草さんの原稿は『大悲の願船に乗じて光明の広海に浮びぬれば、至徳の風静かに、衆禍の波転ず』の風航を感知させられます。

△「年頭に想ふ」の随想は、年末に御縁の深い方の急死に遭ひ、遅々として筆が進みませず、発行もすこしおくれました。お海容下さい。

——○——

御案内

毎月第一、二、三日曜午後一時半、一道会館講話。

毎月第四日曜午前十時、岡崎市東別院同朋会館、歎異抄講讃。午后一時、藤川町光和会例会法話。

毎月二十四日、午前午后、昭和区小桜町教西寺法話会。

毎月第一日曜午后六時半、歎異抄輪読会。東区葵町一〇、善法寺。

定価　一部　十七円（送共）
半年　百円（送共）
一年　二百円（送共）

編集・発行人　花田正夫　名古屋市千種区千種町馬走二八
印刷人　奥川正生　名古屋市南区駅上町二ノ二八
発行所　慈光社　振替口座名古屋一〇四七〇番

慈光　第九巻第一号昭和三十二年七月十五日発行（毎月一回十五日発行）
昭和二十四年七月十五日第三種郵便物認可